



## 名古屋テレビ放送

### 横井 正彦社長

# テレビの新しい価値を見出し コンテンツを豊かに

クワクする時代とも言えます。テレビが本来持っている、時代を切り開く力、最先端を行く力が試される節目の年ですね。

——社長として取り組んだ課題、成果を。

**横井** いろいろやってきましたが、二つに絞って話すと、時代の最先端を走り続けるためには次世代技術への対応が必須だと考えました。「Nex, BN」(≡Nex t+NNBN)、いわば名古屋テレビ(NBN)の次代を考える組織を立ち上げ、チームに「4K」への対応、ネットとの連携、テレビの役割を改めて考えよう、と三つの命題を与えました。提言を受けて、4Kについては、二〇一四年九月にローカル局としてはいち早く4K番組を作りました。翌年の九月には、ローカル局として他に先駆けてHDRを備えた4K編集室を整備し、今は「名古屋行き最終列車」を4Kで制作しています。

もう一つが先ほど述べた現状認識、危機感を社員に持ってもらうこと。昨年四月、第四次中期計画を作って動き出しましたが、危機

感をバネに自分たちを変えていくチャレンジをしようというのが計画の柱になっています。これまでの成功モデルに安住せず、売るもの(プログラム、タイムテーブル、番組)を変えていく。売り方を変える(新しい営業手法の開発)。自分たちが変わることと厳しい時代を乗り切っていくと取り組んできました。

——「4K」浸透の見通しは。

**横井** 次世代技術への基本的な考え方として、技術発展の成果を視聴者に還元することが大事だと思っています。4Kにしかできない表現手法を開発する。4Kによって、これまで人類が見たこともないような世界に視聴者を連れて行く。これは私たちの責務です。例えばうちが作った「4Kどうぶつ図鑑」は、東山動物園の動物たちを4Kで舐めるように撮影したコンテンツです。視聴者は小さな動物の肌の輝き、ぬめりを人類史上初めて目にしたはずで。

「4Kは地上波に乗らないから」との議論は、個人的には意味がないと思っています。映像の圧

名古屋テレビ放送(メ〜テレ)は四月一日、開局五五周年を迎える。当地方のテレビ界はデジタル化を経て、「4K」「8K」時代を視野に入れながらも、名古屋地域へのこだわり、視聴者サービス、インターネットとの共存など多くの課題を抱えている。節目の年を機に、どう飛躍しようとしているのか、テレビ新時代への対応など、名古屋テレビ放送の横井正彦社長に聞いた。(聞き手/中部財界フォーラム社塚本隆代表取締役)

——一九六二年四月に開局。五五周年を迎えた感想を。

**横井** 社長に就任して、これまでの周年ドラマを見ました。高い評価を得た三五周年の「深夜特急」、四〇周年の「SABU(さぶ)」などを見て感じたのは、テレビはドラマに限らず、常に時代の最先端を走ってきた、若いメディアだということでした。そして今、おそらく初めて自分より若いメディア、インターネットに脅かされている。五五周年の今年は、我々がこのまま老いていくのか、時代の最先端を行くメディアであり続けるのか、その境目の年になると思います。

——社員にはどのように思いを伝えましたか。

**横井** 今年の年賀式の挨拶では、「テレビの今」をリアルに見縮技術はどんどん進んでいて、帯域の調整と合わせていざ解決されるでしょう。さらに大きく言えば、IP通信網が技術の発展で容量、スピードとも幾何級数的に進化しており、IPにすべての動画コンテンツが乗ってしまう時代が来るかもしれない。どちらが早いのか、というだけの話です。いずれにしても、地上波だけが4Kを乗せられない劣後メディアになっていいはずがない。視聴者への責務として積極的に4Kに取り組んでいくと考えています。

——番組制作などコンテンツでの成果は。

**横井** 番組作りで重視していることに地域貢献があります。私たちは、地域のためのテレビでありたい。地域の人々の命と安全を守る。地域の価値、地域の力を高める。地域の人々の心に寄り添う。それがローカルテレビの役割だということですね。

三年前に三重県尾鷲市に常駐のカメラマンを配置しました。南海トラフ巨大地震への放送の使命を果たすためです。二〇一二年から

つめた上で、テレビの明日を考えていこうと呼びかけました。「今」とは、HUT(総視聴率)が低下し、リアルタイム視聴が崩れ、動画配信など新たなプラットフォームによって動画消費時間の争奪戦が起きている。そして広告媒体としてインターネットとのパイの激しい奪い合いが起きている、この現状です。

——テレビの存在意義が問われていると。

**横井** テレビは我々が生きていくための情報を遍く伝えるという社会インフラの役割を担ってきました。一方で、圧倒的なリーチをもつ広告媒体として支配メディアとなってきた。その長年謳歌してきた地位が初めて崩されようとしています。厳しい時代ですが、逆に言えば、チャレンジングな、ワ

始めた池上彰さんの特番「巨大自然災害から命を守れ」で、年一回、暮らしようという観点で人々を守る番組を作り、夕方のニュース情報番組「UP!」で月一回防災特集をやっています。

また、この地方でうちだけが名古屋制作している朝の情報番組「ドデスカ!」が好評で、視聴率が上昇中です。年末に番組を休止した際には、「違う番組では朝が来た気がしないし、力が湧かない」と視聴者から抗議をいただきました。嬉しかったですね。

「名古屋行き最終列車」も看板番組として評価していただいています。四月には新しい番組「岐阜にイジュー!」も始まります。白川町に二人の女性が移住してきて地元の人々と触れ合うドラマです。このように地元に着した番組でメ〜テレが進んできたのが成果といえます。五五周年では「もっど!地元応援団」をキャッチフレーズに、さらに深化させようと考えています。

——新聞社出身ですが、テレビと新聞の大きな違いは。